

Title	身延、静岡方面見學旅行記
Sub Title	
Author	淺子, 勝二郎(Asako, Shojiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1928
Jtitle	史学 Vol.7, No.1 (1928. 3) ,p.151- 153
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19280300-0155">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19280300-0155</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 彙

# 報

## 身延、静岡方面見學旅行記

十月十六日（日曜）

書院の奥水鳴樓に登りて庭苑林泉の美を賞し、寶物館を觀る。後水尾帝御翰、日蓮上人眞蹟、國寶徵宗皇帝筆雨中山水景、武田信玄寄進明本法華經、水戸光圀自畫自贊等多し、就中波木井實長の寄進狀と稱するものが、世後當寺の經濟上に大いに役立ちしことを知りて、今更ながら一驚を喫したり。

七面山參道を身延川に沿うて行く事數町、橋を渡り數十級の石磴を登れば、草庵の舊跡あり。

午前六時五十二分東京驛發。身延驛着午後一時三十六分。自動車にて久遠寺に向ふ。

「開會闢」と大書せる額を掲ぐる總門に入る。開會とは蓋し佛教天台家の語にして、彼此の隔離を開き通せしむことなりと。身延町を通り、三門前にて車を下る。

三門を潜り、鬱然として晝猶暗き巨杉の木陰、菩提梯と稱する二百八十七級、高さ三百四十八尺の石段を喘ぎつゝ登れば、諸堂は薨か連ひ。

大客殿、位牌堂、釋迦堂より祖師堂に入る。堂は南に面し、間口十二門、奥行三十四間、結構壯麗、金色燦然と輝き經韻妙香思はず襟を正さしむ。

同夜旅館にて別府氏所藏の古文書を見學す。建武元年北畠親房自署の雜訴決斷所牒を始め、鎌倉南北朝足利時代のもの多く、大いに利益を得たり。

十月十七日（月曜、新嘗祭々日）

午前九時、出發自動車にて先づ淺間神社に詣て、臨濟寺に至る。骨を奉安せる廟所にして、金銀を鏤め、珊瑚の天蓋、瑪瑙の瓔珞などあたりまばゆく、中央寶龕の中、水晶八角の玉塔に納めたるは碎身の舍利にして尊し。

授戒の間には狩野元信の描ける牡丹に孔雀の模、梅林の戸棚あり。

臣藤原佐右衛門尉なり。法を大休國師に嗣ぎ、勅證寶珠國禪師と號し、又雪齊長老と稱す。當寺に住し、更に師大休大和尚を請して開祖となし、自ら下て二世に居り、今川家の執權職を兼ね。

後奈良天皇は師を道學の師範とし給ひ、特に深き聖慮を以て宮中に迎へ給ふ。天皇は天文十九年師に圓滿本光國師の號を賜へり。今其勅文御宸翰を左に掲ぐ。當寺開山堂に掲ぐるものは是なり。

朕曩時聞大燈正傳挑在師之室下詔迎師八內密參垂語受其示誨有年于茲矣得師印證之後欲以國師稱之未遂其志遠道風於北闕輯德化於西京本體如然靈光寔大人妙用也

蓋例在曰之旨以特賜之號稱之爲圓滿本光國師之爾

天文十九年二月七日

御花押

大休國師門徒等

大休大和尚の當寺開山となるや、天朝は直ちに此寺を以て一國一寺に限る勅願寺となし給へり。爲是「勅東海最初の禪林」の勅額を賜はる。爾來之を本堂前額に掲げ來れり。

徳川家康は幼時當寺に於て雪齊長老即ち寶珠護國禪師の下に訓育を受けたりとて、その「手習の間」と稱する部屋今尚ほ當寺に在り。

境内廣闊、大庫裡、護國道場、傳衣閣、無想庵等あり。開山堂

には正親町天皇の尊牌あり。

護國道場の摩利支天の尊像は、曾て家康陣中の守護神として常に携帶せし、御金印面に顯はしたる摩利支天の尊影に模し、鎌倉の佛師に命じ作らしめ給ふ所といふ。

後奈良天皇女房奉書、正親町天皇宸翰、同女房奉書、同御添狀、石船、古法眼元信筆の金屏風、雪齊長老陣中之袈裟、同長刀、木鑑、武田信玄判物、同勝頼判物、勝頼所立の古下馬札、今川氏眞、同義元判物、家康朱印狀、由比正雪書狀、太原大和尚年忌法語、大龍山開山并創設法語、林濟寺領井末寺書付草案、雪齊長夢筆今川家年禮儀式書寫(庚戌十二月十一日)宗子判の奥書あり等寶物又多し。

今川氏輝、雪齊長老及び中村一氏の墳墓に詣り、義元の廟を拜して臨濟寺を辭し、寺町菩提樹院に由比正雪の首塚を見て、久能山に向ふ。

十一時二十分山の麓に着き、茶亭にて晝食を認む。

天文

十九年

二月

七日

久能忠仁、此山に堂舎を構へ、久能寺と稱し、閻浮檀金五寸餘の千手觀音を安置す。毎行基菩薩此山に來り、當山生育の楠一本を取り、胸中に波の閻浮檀金の聖像を納め、本尊とすといふ。斯くて一時は僧舍三百六十坊、衆徒一千五百人と稱せられしが、嘉祿年間山火に罹り、廢寺となる。其後甲斐の武田信玄、城砦を設け徳川氏の世に至りて神原大内記當山の守護たりしも、元和家康の薨去と共に、其靈廟地となる。遺骸は翌三年天海によりて、下野の日光に移されしも、堂塔は依然として存し、靈廟は今別格官幣

十六曲之字形の石礎を上る。此間凡六町、山門を経て、雁木坂を登れば、樓門あり。後水尾院の勅額、東照大權現の五大字を題せらる。次に唐門あり。境内には拜殿、内陣、内内陣、その建築華麗を極む。金碧照耀、粉飾爛然たり。此を距る數十步、墓塔あ

り。石を以て築造す。俗に寶塔と云ふ。老樹滿山、社殿參差、閑寂悠々の異境なり。靈廟を拜し、寶塔に謁し、寶物館に入る。

神寶甚だ多き中にも、家康の遺品、鉛筆、枕、時計（眞鍮製鐵機械、外覆黒革製、西暦千五百八十一西班牙マドリッドに於て製造）等は特に注意を惹けり。

山を下り、羽衣の松に夢の國を想ひ、龍華寺の富士を賞し、庭内の大蘇鐵、仙人掌に驚き、隣接鐵舟寺を訪る。同寺は補陀山久能寺の廢寺となれるか惜み、幕末の傑士山岡鐵舟の再興せしものにして、舊時の觀音堂今猶存し、本尊觀音菩薩<sup>行基七軀</sup>（作の一は久能寺門<sup>白</sup>の奥書あり）六月十七日、沙<sup>門</sup>久能寺縁起（康永元年壬辰<sup>1342</sup>）の傳寶なりといふ。家康陣中の大槍、久能寺縁起（康永元年壬辰<sup>1342</sup>）自然木の虎、清水の次郎長の木像等を観る。

鐵舟寺より清水を経て、江尻に出て、五時廿分の列車にて歸京す。

斯くして二日に亘る見學旅行は、無事に愉快に終を告げぬ。

最後にこの行諸所に於て、見學の便宜を與へられし方々に對して、茲に謹んで感謝の意を表す。（淺子勝二郎）

## 會 告

本會々費昭和二年度分未拂込

の御方へは近日集金郵便差立

可申候間御不在にても御支拂

被下様御願上候也

昭和三年二月

三田史學會